

# 形而上学における合成と表象

室田 憲司 (Kenji MUROTA)

慶應義塾大学非常勤講師

## 1. はじめに

近年、ある種の哲学者たちのあいだに、“伝統的”な意味での形而上学（すなわち、アприオリな考察を中核にした、実在の基本構造に関する体系的な研究）を、新たな視点から擁護する運動が見られる。本講演では、こうした運動の検討を通じて、単なる意味論的考察にはない、形而上学的考察に特有の問題設定を浮き彫りにしたい。

## 2. 形而上学擁護運動の検討

### 2-1. 存在論的関与者特定法から担い手特定法へ

Quine らの存在論的関与者特定法は、一見、言語の意味論的考察だけに基づいて存在論を展開する方法に思える。しかしこの方法が成功するためには、単なる意味論的考察だけでなく、独立した形而上学的考察も必要になることが次第に判明してきた。

こうしたなか、Armstrong など、実在論的嗜好をもつ哲学者たちのあいだに、真理付与者特定法が広がっていった。この方法は、真なる文はどれも真理付与者 (truthmaker: 実在の側に存在して、文を真ならしめる存在者) をもつと想定し、与えられた真なる文に対して、その真理付与者となる存在者を特定するものである。

他方、Lewis らは「担い手特定法」と呼ぶべき方法を用いて存在論を展開した。この方法は次の手順を踏む: [1] データとして与えられた現象が成り立つためには、一定の役割が何らかの担い手によって果たされていなければならないことを示す; [2] その担い手となる存在者に関する諸仮説を提示する; [3] 最も適切な仮説を選び出し、その存在者がその担い手として存在すると結論づける。この方法は、実在についての独立した考察を含む“最良の説明への推論”である。そして真理付与者特定法は、文への真理付与という役割の担い手を探し出す、担い手特定法の一つとみなしうる。

### 2-2. 二次元可能世界意味論に基づく概念分析の擁護

アприオリな概念分析は Quine らの攻撃により信用を失っていた。だが Chalmers や Jackson らは、二次元可能世界意味論に基づいてそうした攻撃をかわし、アприオリな概念分析を擁護したうえで、それを形而上学的考察の中核に据えた。

しかしながら、彼らの形而上学には次の問題点がある。すなわち、形而上学的可能性の範囲はそれほど明らかでないにもかかわらず、形而上学的可能世界の存在論的地位を不問に付して、そうした諸世界から成る空間の存在を前提している点である。そこで、この種の形而上学が成功するためには、まず、形而上学的可能性の範囲（もしくは、形而上学的可能世界を適切に記述する言語）を確定しておかなければならない。そのためには、形而上学的可能性に直接関わる諸概念、すなわち形而上学的概念（存在、同一性、部分 - 全体、可能性・必然性など）の分析を行う必要があるだろう。

形而上学的概念は単なる常識的概念ではなく、形而上学的理論における一定の役割

と結び付いた理論的概念でもある。そのため、形而上学的概念の分析においては、単なる内包の確定だけでなく、理論的役割に応じた内包の改定を行う必要もしばしば生じるだろう。そしてその際には、担い手特定法が主要な手段となるだろう。

### 3. 合成的形而上学の粗描

#### 3-1. 存在論的分析：合成関係とカテゴリー

以上の検討から、形而上学的考察においては担い手特定法の使用が鍵になることがわかる。この方法ではまず、実在に関する存在論的仮説を言語とは独立に提示できなければならない。しかしながら、もしこうした諸仮説が形而上学特有の問題設定によって制約されていなければ、形而上学的考察は混沌に陥ってしまうだろう。

そこで、こうした問題設定を明らかにするために、真理付与者特定法における〈最小の真理付与者〉という概念に注目しよう。〈真理付与者〉の定義によると、世界全体は〔ある種類の〕すべての真理の真理付与者であることになる。しかし形而上学者は、単に「世界が存在して、その世界全体がすべての真理を真ならしめている」と主張するだけでなく、「世界は内部構造をもち、世界の異なる部分は異なる真理を真ならしめている」と主張して、各真理の最小の真理付与者（つまり、その文の真理付与者のうち、他の真理付与者を構成要素として含まないもの）を特定しようとするだろう。

このような、「世界は内部構造をもち、多様な役割を果たす構成要素から合成された複合体である」という合成的世界観は、〈世界〉という形而上学的概念の中核を成す考えであろう。そしてこの合成的世界観の肉付けが、単なる意味論的考察にはない、形而上学特有の問題設定であると考えられる。

合成関係には様々な種類がありうる（メレオロジック関係、例化関係など）。また、ある種の合成関係は構成要素の分類を要求するので（例化関係による特殊者／普遍者の分類など）、合成関係は存在者のカテゴリー分けの最も重要な基準になる。

以上の考察から、適切な“存在論的分析”（つまり、合成関係とカテゴリーとよる実在の分析）の提示こそが形而上学特有の問題設定であり、そうした分析の提示を目指す“合成的形而上学”こそが形而上学の核心であると考えられる。

#### 3-2. 存在論的分析の根拠：形而上学的表象関係

しかしながら、合成的形而上学はここで重大な問題に直面する。それは、「存在論的分析を根拠づけるものが、実在の側に存在するか？」、換言すれば、「合成的形而上学による存在論的分析の主張には真理付与者が存在するか？」という問題である。もし存在しなければ、存在論的分析の主張は単なる恣意的な解釈にすぎないことになる。

そこで、存在論的分析の主張の真理付与者が存在する状況として考えられるのは、以下の四通りくらいだろう：(A1) 各合成関係や各カテゴリー自体が存在者として存在する；(A2) すべての形而上学的可能世界が存在者として存在する；(B1) 各合成関係や各カテゴリーの代替者となる存在者（表象）が存在する；(B2) すべての形而上学的可能世界に対して、その代替者となる存在者（表象）が存在する。

これら四候補はどれも大きな困難を抱えている。だが、合成的形而上学の動機（合成的世界観）によく適うのは、心をもつ解釈者の存在を前提しない根源的な表象（これを「形而上学的表象」と呼ぶ）を措定する(B1)か(B2)であろう。よって、合成的形而上学の成否は、〈形而上学的表象関係〉という概念の分析にかかっているだろう。